天界の秘義

AC5普遍的　信仰の教義

1:1 初めに、神が天と地を創造した。
1:2 地は形がなく、何もなかった。やみが大いなる水の上にあり、神の霊は水の上を動いていた。
1:3 そのとき、神が「光よ。あれ。」と仰せられた。すると光ができた。
1:4 神はその光をよしと見られた。そして神はこの光とやみとを区別された。
1:5 神は、この光を昼と名づけ、このやみを夜と名づけられた。こうして夕があり、朝があった。第一日。
1:6 ついで神は「大空よ。水の間にあれ。水と水との間に区別があるように。」と仰せられた。
1:7 こうして神は、大空を造り、大空の下にある水と、大空の上にある水とを区別された。するとそのようになった。
1:8 神は、その大空を天と名づけられた。こうして夕があり、朝があった。第二日。
1:9 神は「天の下の水は一所に集まれ。かわいた所が現われよ。」と仰せられた。するとそのようになった。
1:10 神は、かわいた所を地と名づけ、水の集まった所を海と名づけられた。神は見て、それをよしとされた。
1:11 神が、「地は植物、種を生じる草、種類にしたがって、その中に種のある実を結ぶ果樹を地の上に芽生えさせよ。」と仰せられると、そのようになった。
1:12 それで、地は植物、おのおのその種類にしたがって種を生じる草、おのおのその種類にしたがって、その中に種のある実を結ぶ木を生じた。神は見て、それをよしとされた。
1:13 こうして夕があり、朝があった。第三日。

1:14 ついで神は、「光る物は天の大空にあって、昼と夜とを区別せよ。しるしのため、季節のため、日のため、年のために、役立て。
1:15 天の大空で光る物となり、地上を照らせ。」と仰せられた。するとそのようになった。
1:16 それで神は二つの大きな光る物を造られた。大きいほうの光る物には昼をつかさどらせ、小さいほうの光る物には夜をつかさどらせた。また星を造られた。
1:17 神はそれらを天の大空に置き、地上を照らさせ、
1:18 また昼と夜とをつかさどり、光とやみとを区別するようにされた。神は見て、それをよしとされた。
1:19 こうして夕があり、朝があった。第四日。
1:20 ついで神は、「水は生き物の群れが、群がるようになれ。また鳥は地の上、天の大空を飛べ。」と仰せられた。
1:21 それで神は、海の巨獣と、その種類にしたがって、水に群がりうごめくすべての生き物と、その種類にしたがって、翼のあるすべての鳥を創造された。神は見て、それをよしとされた。
1:22 神はまた、それらを祝福して仰せられた。「生めよ。ふえよ。海の水に満ちよ。また鳥は、地にふえよ。」
1:23 こうして、夕があり、朝があった。第五日。

1:24 ついで神は、「地は、その種類にしたがって、生き物、家畜や、はうもの、その種類にしたがって野の獣を生ぜよ。」と仰せられた。するとそのようになった。
1:25 神は、その種類にしたがって野の獣、その種類にしたがって家畜、その種類にしたがって地のすべてのはうものを造られた。神は見て、それをよしとされた。
1:26 そして神は、「われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。そして彼らに、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配させよう。」と仰せられた。
1:27 神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。
1:28 神はまた、彼らを祝福し、このように神は彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。」
1:29 ついで神は仰せられた。「見よ。わたしは、全地の上にあって、種を持つすべての草と、種を持って実を結ぶすべての木をあなたがたに与えた。それがあなたがたの食物となる。
1:30 また、地のすべての獣、空のすべての鳥、地をはうすべてのもので、いのちの息のあるもののために、食物として、すべての緑の草を与える。」すると、そのようになった。
1:31 そのようにして神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ。それは非常によかった。こうして夕があり、朝があった。第六日。

１　光

２　大空　水と水の区分

３　地　植物

４　二つの光体

5海の生物　鳥

6野の獣　家
畜　這う物　人

７　安息

再生の状態

第一（≠第一日）の状態　幼少～再生の直前：虚無・深い闇

最初の動き：神の慈しみ　水の面での動き　　光？

第二の状態　区別：神のもの「レリクィアエ」信仰の知識

人のもの「プロプリウム」→静止（試練・不運・悲嘆等で一時的に）

→**レリクィアェはプロプリウムが静止し**ないと明らかにならない。

残：刃物で削って少なくなる・量が少ない
遺：物を残して立ち去り、そのものがむっくりと目立つ（貴：貝）

第三の状態　悔い改め：自認・告白・祈願・新生

生きていない∵自ら出ていると考える　柔草→種を結ぶ草→実を結ぶ樹

第四の状態　愛によって動き、信仰によって照らされる

内に灯された信仰と仁愛：二つの光体

第五の状態　信仰から語り、真理と善を確信する。

生きているものを産み出す：海の魚・空の鳥

第六の状態　信仰から真理を語り、愛から善を行う

産み出すもの→「生きた魂」「獣」

愛と信仰から同時に行う→**霊的人間「像」**

霊的生命：信仰の知識・仁愛の業

<戦い>→愛が勝利すれば**天的人間：第七の状態**

自然的生命：肉体と感覚

1:1 初めに、神が天と地を創造した。

天　内部人間

主＝イエス・キリスト

「初めに」再生の最初の期間

創造→再生

地　外部人間

1:2 地は形がなく、何もなかった。
やみが~~大いなる水~~の上にあり、
神の霊は~~水の~~上を動いていた。
↓
厚い闇が**深淵**תְּהוֹם *tĕhowm*
の面の上にあり、
神の霊は**水**מַיִם**の面**の上に動いていた。

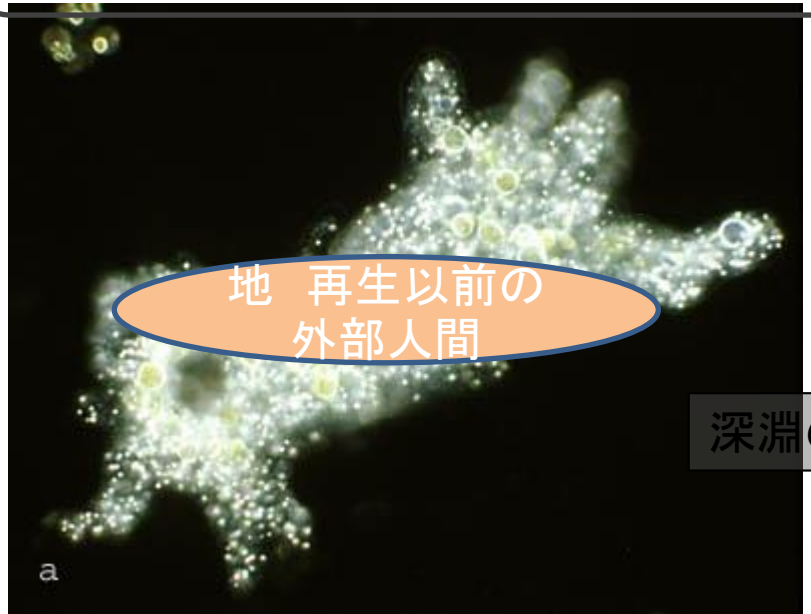
天　内部人間

除去！

黒い塊　無生命

厚い闇　暗黒

愚鈍
無知：主への信仰、
　　霊的天的生命
→妨害物



地　再生以前の
外部人間

虚　善がない
無　真理がない

深淵の面＝貪欲、偽り

1:2 地は形がなく、何もなかった。
やみが~~大いなる水~~の上にあり、
神の霊は~~水の~~上を動いていた。
↓
厚い闇が**深淵**תְּהוֹם *tĕhowm*
の面の上にあり、
神の霊は**水**מַיִם**の面**の上に動
いרָחַף *rachaph motitatio*ていた。

天　内部人間

除去！

黒い塊　無生命

厚い闇　暗黒

深淵の面＝貪欲→偽り

愚鈍
無知：主への信仰、
霊的天的生命
→妨害物

地　再生以前の外部
人間

神の霊　動く・孵
神の霊＝慈しみ

水の面＝reliquiae　遺り

残：刀で削り取って小さくなった骨
遺：忘れてあとに置いておくこと
遺珠　遺産　遺宝　遺卵

真と善の知識
外的なものが取り除かれない限り決して現れない

1:3 そのとき、神が「光よ。あれ。」と仰せられた。すると光ができた

善と真

高いもの

善と真を知らない　悪と偽を
善と真だと思っている。
↓光
これが善と真ではないと悟る。

「主がおられ、
主が善と真そのものである」

1:4 神は~~その光をよしと~~見られた。
→神は光luxをごらんになった。そしてそれは善であった。

光は善そのものである神から来ているので、善と呼ばれた。AC21

そして神はこの光とやみとを区別された。
やみtenebrae：人のもの　propria

1:5 神は、この光を日昼と名づけ、このやみを夜と名づけられた。

昼：主のもの

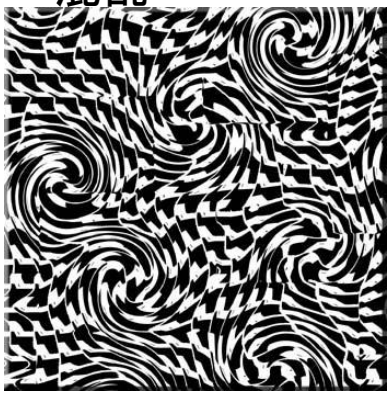
夜：人のもの

こうして夕があり、朝があった。第一日。

夕：人のもの
↓
朝：主のもの

1:6 ついで神は「~~大空よ~~広がりよ רָקִיעַ *raqiya`*。水々の間にあれ。
水々の中の水々~~と水との間~~に区別があるように。」と仰せられた。

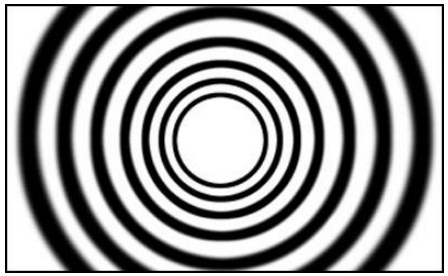
混乱



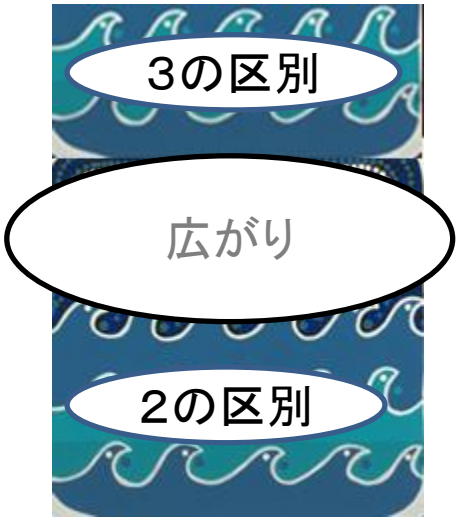
善と真理の知識 cognitiones
最初の光 「主がおられ、主は善そのもの、真そのものである。」

区別①

1:7 こうして神は、広がり~~大空~~を造り、
広がり~~大空~~の下にある水々~~と~~を区別し②、
広がり~~大空~~の上にある水々③を区別された。するとそのようになった。
1:8 神は、その広がり~~大空~~を天と名づけられた。こうして夕があり、朝があった。第二日。



人：内部人間hominem internum 外部人間hominem externum
抽象的概念 cognitiones　　情報 知識　scientifica
広がりの上の水々　　広がりの下の水々



区別③　　区別 ②「善と真は自分が行い考えている
☆内部人間→「広がり」　天と呼ばれる。知的・霊的な心

下にある情報知識を整理・精査し②、概念や基本原則を作り出す③
観察したことから抽象的法則を自ら考え出す。

貪欲と感覚の迷妄などのpropriaを通して、
主によって導き、撓められて、真と善に向かう。

知情意
知性：物事を考え判断する能力
感性：外界の刺激を感じ取る能力
悟性：感性によって受け取った感覚内容を整理しまとめて概念化する能力
理性：概念を組み立てて積極的に考え、結論を引き出す能力
理知・英知・知恵
邪知・奸智
知識：知性が認識という作用を成り立たせ、その認識の結果得られた確実で根拠のある事柄
情報　data 資料　事実　情報fact
認識：認識は認知（はっきりとそれと認める）よりも深く、その意義を知ること。
　　この働きの結果心の中に蓄えられたものが知識
感知　直感的に心に感じて知ること
知：矢のようにまっすぐ物事の本質を言い当てること
認：何ものであるかを見定めること
識：物事を区別して見分けること
悟：思い当たる　五；×型に交差　吾；かたりあうこと
覚：知覚が出会ってはっと思い当たる
醒：曇りがとれて済んだ気持ちになる
暁：明白に知ること　暁悟
思：まごまごと考える幼児の千門の閉じていない頭でおどる　思惟　思慮　思議　思案
念：心中深く思う
想：ある対象に向かって心で思うこと
慮：次から次へと心を配る
懐：心の中におもいをいだく
憶：さまざまにおもいをはせる
考：曲がりくねって奥までかんがえる
勘：まっすぐ奥底をついてかんがえる
案：押したり押さえてみたりして調子をみつつかんがえる

1:1 初めに、神が天と地を創造した。

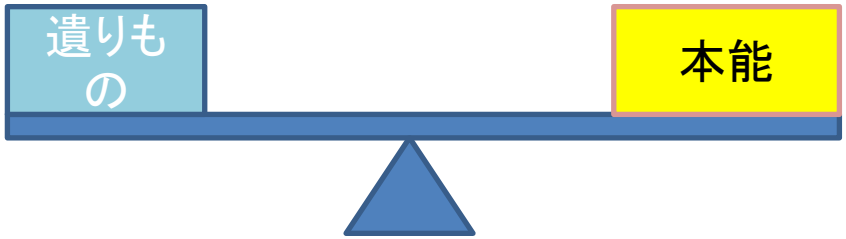
最初に霊的な心を創造し、次に自然的な心を創造された。

人は小宇宙。そのため天界に向けて準備することができる。天と地がそれぞれの中にある。
「御心が行われますように。天におけるように、地においても」

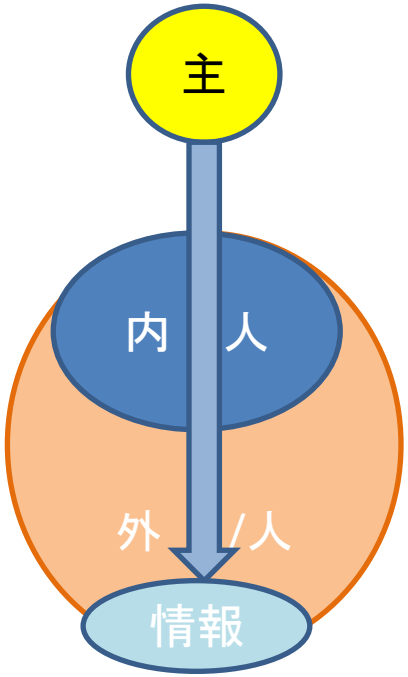
霊的に信条として、そして自然的な思考や情愛においても。

学ぶと、記憶の中に情報として蓄積される。
これを高めることで概念となる。

新しい自然的な心は、水を押し広げて確信を産み出す。人格の成長



1:9 神は「天の下の水々は一所に集まれ。かわいた所が現われよ。」と仰せられた。するとそのようになった。



Scientifica 善と真の情報：自然的・霊的・天的
→記憶に蓄積され、主によって引き出される

→一カ所に集まった水々： cognitiones et scientifica
「海」知識と情報の集合体
かわいた所：外/人「地」 容器28
人格の形成

1:10 神は、かわいた所を地と名づけ、水々の集まった所を海と名づけられた。神は見て、それをよしとされた。

1:11 神が、「地は植物、種を生じる草、種類にしたがって、その中に種のある実を結ぶ果樹を地の上に芽生えさせよ。」と仰せられると、そのようになった。
1:12 それで、地は植物、おのおのその種類にしたがって種を生じる草、おのおのその種類にしたがって、その中に種のある実を結ぶ木を生じた。神は見て、それをよしとされた。

柔らかい草
種を生じさせる草
種を持つ実をつける木

「信仰による生」
自分からの善と真理→本物ではない
本物の信仰；主から善と真理のすべてがきている。

信仰による生き方を受け入れる<u>備えの状態</u>　生きていない状態
種蒔き：主
種：みことば
地：人

受け入れる：後悔→悔い改め（探・認・願・新）

①記憶としての信仰：ただの情報としての信仰

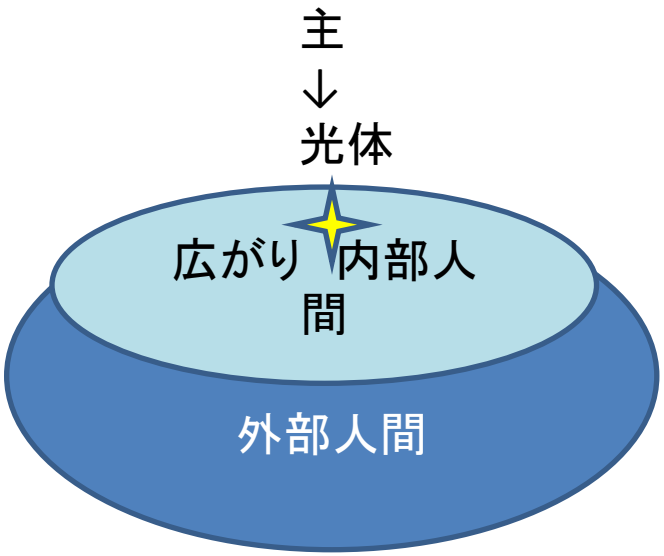
②知的信仰：頭の中だけの信仰

③心による信仰：愛の信仰　救いの信仰

	第一日	第二日	第三日	第四日	第五日 ③～	第六日	第七日
創造物	光	ひろがり	かわいた所	光体	水生き物 海巨獣	生き物 家畜 這う物 野獣	天地万象
			柔草・種をつける草・実を結ぶ木	大光体 小光体 星	鳥　天 翼　鳥	人 似姿 男と女	聖
区別	光と闇	水と水		光と闇			
名称	日と夜		地 海				
	善し		善し	善し	善し 産・増	非常に善い	安息

1:14 ついで神は、「光る物は天の大空にあって、昼と夜とを区別せよ。しるしのため、季節のため、日のため、年のために、役立て。
1:15 天の大空で光る物となり、地上を照らせ。」と仰せられた。するとそのようになった。
1:16 それで神は二つの大きな光る物を造られた。大きいほうの光る物には昼をつかさどらせ、小さいほうの光る物には夜をつかさどらせた。また星を造られた。
1:17 神はそれらを天の大空に置き、地上を照らさせ、

二つの大光体：単数　愛と信仰
大きな光体：愛　　意志
小さな光体：信仰　　知性
→一つにならなければならない



星：信仰の諸概念　cognitiones fidei
人：意志と知性
　愛の受容：信仰の受容
愛の信仰　天界は愛の天界
信仰とは、信仰の教えの知識・承認だけではなく、
信仰の教えに従うこと。

しるしのため、季節のため、日のため、年のために、役立て。
霊的事柄と天的事柄の交替→定め

1:18 また昼と夜とをつかさどり、光とやみとを区別するようにされた。神は見て、それをよしとされた。　昼：善　夜：悪
1:19 こうして夕があり、朝があった。第四日。

1:20 ついで神は、「水は生き物の群れが、שֶׁרֶץ 群がるようになれ、這う物、生きた物を這い出させ、また鳥は地の上、天の~~大空~~広がりの面の上を飛べ。」と仰せられた。

大光体の点火と内部人間への設置→外部人間は光を受け、生き始める。（以前は死）

最初は、自分が善を行い、真理を語るように思うことを許される。（柔らかい草・・・）
↓
その後、善と真理のすべては主お一人から来ることを認める。（生き始める）

柔らかい草　生きていない
這うもの　魚：知識　外部人間
鳥　合理的、知的なもの　内部人間

主への信仰が含まれたものが生きた魂と呼ばれる。　自ら動き、這う。Arcana
天使の表現・考え・思考すべてが生きている

1:21 それで神は、海の巨獣と、その種類にしたがって、水に群がりうごめくすべての生き物と、その種類にしたがって、翼のあるすべての鳥を創造された。神は見て、それをよしとされた。

魚：知識　主から信仰によって生きる
海の巨獣、鯨；一般原理

1:22 神はまた、それらを祝福して仰せられた。「~~生めよ。~~実を結べפָּרָה 、（愛）ふえよ（真理）。海の水に満ちよ。また鳥は、地にふえよ。」
1:23 こうして、夕があり、朝があった。第五日。

1:24 ついで神は、「地は、その種類にしたがって、~~生き物、家畜や、はうもの、~~①生きた魂、その種類にしたがって~~野の獣、~~②獣、動く物、③地の野獣、を生ぜよ。」と仰せられた。するとそのようになった。
1:25 神は、その種類にしたがって~~野の獣~~①地の野獣、その種類にしたがって~~家畜~~②獣、その種類にしたがって地のすべてのはうものを造られた。神は見て、それをよしとされた。

水が産み出す這う物・地の上の鳥；知性に関係
地が産み出す生きた魂；意志に関係
獣：人の情愛
地の野獣：貪欲・快楽

47 再生　外部人間から始まり、内部人間に進む。

再生の第5段階：信仰の原則から語り、自らが真理と善にいることを確認する。
→海の魚、天の鳥

再生の第6段階：信仰と、信仰から生まれた愛から、真理を語り、善を行う。

愛から行い、信仰から行うに応じて「霊的人間」「神の像」となる。
49
1:26 そして神は、「われわれ（天使）に似るように、われわれのかたちに（我々の似姿דְּמוּת demutに従って、我々の像צֶלֶם tselemである）人אָדָם を造ろう。そして彼らに、海の魚、空の鳥、家畜獣、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配させよう。」と仰せられた。

主お一人だけが、人。
最古代教会では主と直接話し、主は人として出現された。
主の内の「愛の善」と「信仰の真理」を感知し、「人のもの」、と言った。

人、人の子は、最高の意義では主を、内的意義では、英知と理知を意味した。
51,52
霊的人間；像　　光の子、友　　外部→内部
　　似姿に従った像　　海の魚→空の鳥→獣→地のすべて→地をはうすべて
天的人間；似姿　神の子　愛の善　内部→外部
　　獣→鳥→海の魚

注　TCR591 最初に、内部人間が改革されなくてはならない。外部は、その内部をとおして改革され、こうして、人間は再生する　（∵洪水以前と以後）

1:27 神はこのように、人をご自身の~~かたち~~像①に創造された。神の~~かたち~~像②に彼を創造し、

①像：その信仰
②神の像：愛
∴霊的人間
1:27男と女とに彼らを創造された。

理性：男
意志：女
結婚：理性と意志が一致して働くこと

1:28 神はまた、彼らを祝福し、このように神は彼らに仰せられた。「~~生めよ~~実を結べ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。」

実を結べ：善
ふえよ：真理
地を従えよ。支配せよ：霊的人間は争闘の状態にいる。

1:29 ついで神は仰せられた。「見よ。わたしは、~~全地の上にあって、種を持つすべての草と、種を持って実を結ぶすべての木~~をあなたがたに与えた。それがあなたがたの食物となる。

全地の上にあって、種を結ぶすべての草と
実をもつすべての木
種をつけるすべての木

56,57
天的食物

霊的食物

自然的食物：主に情報知識

種を結ぶ草：役立ちを目指す真理

実を持つ木：信仰から生まれる善
種をつける木：霊的人間
　　実：天的人間

59霊的人間は絶えず争闘の中にいる

時折主が与えられる
喜びが伴った
平安と静穏の状態

1:30 また、地のすべての獣、空のすべての鳥、地をはうすべてのもので、~~いのちの息~~生きた魂のあるもののために、食物として、すべての緑の草を与える。」すると、そのようになった。

58自然的人間の食物

1:31 そのようにして神はお造りになったすべてのものをご覧になった。
見よ。それは非常によかった。こうして夕があり、朝があった。第六日。

60　霊的なもの（信仰の真理）と天的なもの（主と隣人への愛）の結婚が達成

第六日：神の像となる

それまでは悪と偽りに対して、主が闘い、愛が原理となるまで続く。

第六日の終わりに、「非常によい」状態となり、悪霊たちは離れ、善霊がその代わりとなる。
天界、天的楽園に入れられる→第二章　天的人間

64以上は アルカナを明かすには十分ではない。

66
①最古代教会スタイル：霊的・天的なものが叙述されてはいるが、美しい歴史的な形をとる

②歴史的スタイル（アブラム～　ヨシュア・士師記・サムエル・列王）
　：歴史的事実しか現れていないようだが、内意はことごとく異なっている。

③預言者スタイル：最古代教会スタイルのように歴史的なものとなっておらず、字義的には分散しているが、内意は全く

④ダビデの詩編スタイル：預言者の書と通常文の中間